SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

特殊拍連続を許容する現代日本語の傾向と近過去からの言語変化について

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 静岡大学人文社会科学部
	公開日: 2012-10-10
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 城岡, 啓二
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006766

特殊拍連続を許容する現代日本語の傾向と近過去からの言語変化について

城　岡　啓　二

１．特殊拍が連続するまれな音配列について

撥音拍（/N/）、促音拍（/Q/）、引き音拍（/R/[1]）の特殊拍は日本語の音配列では特殊な地位にあり、それ以外の普通拍との組み合わせで使われるのが普通で、特殊拍同士では、組み合わせや順序が自由にはならないし、そもそも特殊拍の連続は、語種（和語、漢語、外来語）に関わらず、あまり使われていない。特殊拍の２連続を考えるなら、９通りの組み合わせがあるが、まず、以下の組み合わせはかなり特殊で、日本語の標準的な体系にはないと言える。

ａ．同一特殊拍の連続（/RR/、/NN/、/QQ/）
ｂ．他の特殊拍に後続する引き音拍（/NR/、/QR/）
ｃ．撥音拍に先行する促音拍[2]、促音拍に後続する撥音拍（/QN/）

とはいえ、Googleでネット上を検索すれば[3]、こういう音素連続に一応対応する表記例がかなり見つかる。

１．よわーーい（/RR/）
２．手の込んだ事が出来ませんん（/NN/）
３．舅がだいっっきらいっ！（愚痴）（/QQ/）
４．んー？（/NR/）

---

[1] 引き音符「―」に対応する音素、つまり長母音の後半に対応する音素であるが、記号は/H/も表われるが、本稿では、/R/で表記する。
[2] 促音拍に後続する撥音拍と言っても同じことであるが、外来語の受け入れにあたって、カンやペンがカッンやペッンにならなかったことを説明するには撥音に先行する促音が認められないと捉える見方の方が重要であろう。
[3] 本稿でのGoogleを使ったインターネットの検索結果は、2011年11月から2012年５月までに検索したものである。

５．ぶらっーと（/QR/）
６．ほっんと[4]、子供って鋭いっていうか、正直っていうか。（/QN/）

間投詞や強調の言い方であり、感覚的な表記の可能性もある。（６）については、ある程度一般化してきているが、他の例は、使う人もかなり限られているだろうし、果たしてこれらの特殊拍連続が２拍分の長さを持っているのかどうかも確かではない。また、（２）の/NN/と（４）の/NR/、（３）の/QQ/と（５）の/QR/の場合は、表記が異なるが、異なる発音に対応しているかどうかも問題にできるように思われる。

特殊拍が連続する組み合わせのうち、残りの/RN/と/RQ/と/NQ/は、現代日本語ではすべてそれなりに使われているが、使用頻度や普及の程度にはかなり差がある。/RN/は現在の日本語では強い制約があるとは言えないが、近過去から現在の制約について考察することが可能である。/RQ/と/NQ/は、後続音が促音という点で共通しているし、両者とも、明治以降に本格的に普及したらしく、制約の言語変化を比較的詳しくたどることが可能である。本稿は、これらの/RN/と/RQ/と/NQ/について、とくに促音が他の特殊拍に後続する/RQ/と/NQ/について近過去から言語変化[5]と現代日本語の状況を調査・考察した結果をまとめたものである。

２．引き音後の撥音（/RN/）について

特殊拍の組み合わせで現代日本語でもっとも普及している/RN/から考えておきたい。松崎（1994：81）によると、『分類語彙表』（旧版、国立国語研究所、1964）には、外来語は「ターン」「パターン」「シーン」「クイーン」「グリーン」「スクリーン」「ラブシーン」「スプーン」「アドバルーン」「チェーン」「プレーン」「ゾーン」の12語あるだけだし、和語は「だあん」「しいんと」「じいんと」の３語だけだという。外来語と一部のオノマトペで普及している状態である。

/RN/の音配列上の制約が以前の日本語では今よりも強く存在したかどうかは、

[4] Googleでは「本当に純粋」は364,000件あったが、口語形「ほんとに」や促音を挿入したものは、「ほんっとに純粋」(69,600件)、「ほんとに純粋」(33,200件)、「ほっんとに純粋」(1890件）だった。

[5] 本稿は主として明治期以降の言語変化を調査・考察の対象にしている。筆者は現代語を正しく理解するためにも近過去からの言語変化が重要であると考えている。近過去は、現代を広く捉えればその中に入り、史的な通時的研究でもありながら同時代の共時的研究でもあるということになるだろうか。

明治期については文学作品[6]などではよく分からない。通常の語彙ではないが、「ふうん」[7]ならかなり使われている。外国人女性の名前なら、夏目漱石はエレーンやジェーンを使っているし、他にも/RN/をかなり使っているが、森鴎外は、新潮社電子媒体[8]で見る限り、まったく/RN/の人名・地名や外来語を使っていない。Berlinもベルリンと書いている。ベルリーンの方が発音として正しいが[9]、すでに幕末の三か国語語彙集の『三語便覧』(村上英俊、1854)でもベルリンとフリガナを付けているので、鴎外は伝統的な発音に従っただけだったかもしれない。ベルリンは以前から漢字で「伯林」と書かれることも多く、「林」という漢字の使用もリンという発音に固定する傾向を補強したことだろう。ところが、オーストリアの首都のWienの場合は、明治期の表記は一定していなかった。/RN/を使い、ヴィ―ンのように表記するのが現代なら正確であるが、これまでに使われた表記形としては、現在最も使われているウィーンの他には、ウイーン、ヰーン、ウヰンナ、ウインナ、ヴインナなどが使われてきたようだ。日本にとってそれほど重要な都市ではなかったのか、岩倉使節団が日本も参加している初めての万博の開催地として明治6年に訪問しているが、『米欧回覧実記』(久米邦武著、1878)でベルリンは「伯林」と書いて、ベルリンとフリガナを付けているが、ウィーンは「維納」と書いて、「ウリ―ン」や「ウリン」という間違いと思われるフリガナを付けている。明治期を通して漢字表記も一定しなかったことや英語のViennaから「維納」や「維也納」の漢字表記が来ているらしいこともウィーンの日本語としての発音を複雑にしたようである。しかし、ある時期まで、/RN/の制約の影響を受け、引き音が削除された発音、つまりウインのような発音も口語としてかなり見られたことも確かである。藤澤廉之助がドイツで出版した『新訳独和辞典』(ランゲンシャイト、1914)がUinのローマ字を使っているし、竹原常太の『スタンダード和英大辞典』(大修館、1924)がUinna以外にUinというローマ字を出しており、ウインという発音が明治後期から大正期には標準形として見るひともいたことを示している。新潮社の電子媒体では、1892年生まれの芥川龍之介も「さまよえる猶太人」(1917)の中で「彼

[6] 本稿では、文学作品の出版年は小田切(1993)をもとにした。これに記載がない場合は、Wikipediaを参照した。

[7] 「ううん」と同様に「ふうん」の発音が引き音ではなかった可能性もある。

[8] 本稿で新潮社電子媒体と呼んでいるのは、CD-ROM版の「明治の文豪」、「大正の文豪」、「新潮文庫の100冊」、「新潮文庫の絶版100冊」のことである。

[9] 独和辞典では『大独日辞典』(登張信一郎著、大倉書店、1932)だけが、流布している間違った発音に抵抗を示そうとしたらしく、「ベルリーン」という表記の日本語を訳語として採用している。

が［…］千五百九十九年には、ウインに現れ」と書き、1927年生まれの北杜夫はもう少し後の世代だが、「楡家の人びと」（単行本の出版年は1964年）の中ではウインを繰り返し使っている。「徹吉ははじめ伯林にいて、次に墺太利の首都維納へ行き、そこの神経学研究所に於て、麻痺性痴呆者の大脳についての一論文をまとめたのであった。ウインには同胞がかなりいた」。また、「ウイン学派」や「ウインの大新聞」という言い方を使っているし、「ベルリンやウインのナイトクラブに出入りする留学生」や「ウインでは見られなかった街を濶歩する軍服姿」や「鴉が群れていたウインの古い鈍いろの寺院」とも書いている。ユダヤ人差別に触れている箇所でもウインとミュンヘンである。「徹吉は自然と猶太人のことに考えが及んだ。ウインでもミュンヘンでも、彼らは極端な侮蔑と排斥の対象とされていた」。

江戸時代のオランダ語からの外来語まで観察を広げると、/RN/の制約の結果と解釈できる引き音脱落形がさらに見つかる。斎藤（1967）によると、「蛇口」の意味のカランはオランダ語のkraanから来ているし、サフランはsaffraanであり、どちらもラーンという発音を含んでいるが、日本語化の過程で引き音の/R/が削除され、ランになっている。七面鳥のこともかつては「からくん（ちょう）」と言った[10]が、オランダ語はkalkoenだから、母音のaを挿入して同一母音連続の「から」にして（音韻同化）、「くん」では引き音を削除している。江戸時代のひとにも発音通りでないことは理解されていたらしく、「此鳥紅毛にカルクフーンと申候を、唱誤りてカラクンと申候……」（『紅毛訳問答』、1750）と説明されているのだという。これらは、/RN/を/N/として日本語化した例で、音配列上の制約の結果と見ることができるだろう。また、斎藤（1967：141）ではmangaanについて「音訳して『満俺』と書いた。今は満俺をマンガンと読んでいるが、もとはマンガーンと読むことが多かった」と言語変化についても証言している。『角川外来語辞典』（荒川惣兵衛）によると、蘭学者の宇田川榕菴は『植学啓原』（1822）で、川本幸民は『気海観瀾広義』（1851）で「マンガーン」を使っていたとされている。いったんは/RN/として日本語化されたが、普及の過程で、当時の日本語らしくない/RN/を/N/に音変化させた例と言える。最初に横浜で売り出されたアイスクリームが「あいすくりん」だったことや、幕末

[10] 最初期からの外来語辞典を調べると、「カラクン鳥」（棚橋一郎・鈴木誠一編『日用舶来語便覧』1912、上田萬年・高楠順次郎・白鳥庫吉・村上直次郎・金澤庄三郎編『日本外来語辞典』1915）、「カラクン・チョー」（勝屋英造編『外来語辞典』、1914）と見出し語になっているので、明治期は言うに及ばず、大正期まで使われていたようだ。

の遣米使節団の参加者がアイスクリームを日記で「アイスクリン」と書いていることが社団法人日本アイスクリーム協会のホームページにある。しかし、個人の耳に聞こえた語形[11]や商品名をそのまま日本語として認定するわけにはいかないし、俗語形は、辞典類などで必ずしも標準形として採用されないので、確認することは容易ではなく、アイスクリームの古い語形としてアイスクリンを確定することはできないようだ。『明治大正新語俗語辞典』[12]では「なまってアイスクリンともいう」と解説して、明治期の古い用例ではなく、昭和に入ってからの「アイスクリン」の使用例を多数あげていて、中には本格的アイスクリームと安物の氷混じりのアイスクリンの区別があったことを示している用例もある。明治・幕末期の古い語としてアイスクリンは確定できないが、幕末の日本人にアイスクリンと聞こえたり、明治初年に販売された氷菓子が「あいすくりん」だったのは、日本語の/RN/の制約が関係していることは間違いないだろう。語末のmでも「ん」に聞こえるのは、現代でもドイツ語の定冠詞のdemとdenの区別が日本人の耳では難しく、どちらも「でん」に聞こえることはドイツ語教師には常識であるし、漢字の「金」や「林」が日本語では「きん」や「りん」とされてきたように、古くからの日本人の聞き取り方が関係していることは容易に推定できる。したがって、ice creamは、アイスクリーンと聞こえた（る）はずであるが、－ンが通常の日本語にはなかったため、引き音が削除され、アイスクリンという語形が生まれるわけである。

明治期から昭和初期にかけての状況は、外来語の受け入れ語形として一般化して考えておくこともできる。荒川（1932：267－268）は、同一語が引き音の有無の両方の発音がある例として10語あげているが[13]、『NHK日本語発音アクセ

---

[11] 咸臨丸で渡米した遣米使節団の一員で、当時25歳だった青年が書いた「柳川當清航海日記」は、『遣外使節日記纂輯一』（日本史籍協会叢書96、東京大学出版会、1928）で読める。聞こえた通りに事物や地名を書いたようで、コーヒーが「カウヒン」、バナナを「バナヽア、ベナヽア」、パイナップルを「パイナアーペル」、ブロードウェイは「フロードウエー」、ナイヤガラを「ナアヤガラ」、ロングアイランドを「ロングアヰラン」などと書いている。アイスクリームについては、よほど珍しかったのか、詳細に書いているが、内容は正確とは言えない。「氷を色々に染め物の形を作是を出す味ハ至てあまく口中に入るゝにたちまち解けて誠に美味なり是をアイスクリンと云是を製するにハ氷を湯にてやわらかくなし其後物の形に入れ又氷の間に入て置時ハ氷のことくになると云尤も右の氷をとかしたる時なま玉子を入れされハ再ひ氷ふらすと云」（前掲書、p.268）。

[12] 樺島忠夫・飛田良文・米川明彦編、東京堂、1984。

[13] 実は、外来語辞典ではこういう語形のゆれについて捉えきれないようである。スプンという語形を例にとると、『外来語辞典』（勝屋編、1914）にも『日本外来語辞典』（上田他編、1915）にも採用されていない。辞典では規範的な語形が採用されることになるので、口語として実際に使われていても正しい語形とは見なされなかったのだろう。

ント辞典新版』(1998) に出ている語形と対比したのが、表1である。荒川のあげる10語のうち4語は撥音が後続する「(ー)ン」であり、特に撥音に先行する引き音の有無でゆれがあったことを示唆している。/RN/の制約ということになるだろう。1998年の語形と比較すると、この間に語形のゆれが消え、語形が定まったことが分かる。引き音符については、10例のうち7例で引き音の使用が固定している。1998年の語形では、引き音の位置が語末ではなく、「シュミーズ」「ダース」「スクリーン」「スプーン」では、すべて、語末から2番目の拍の位置[14]に引き音が来ている。荒川 (1932) がゆれている語形としてあげている「シュミズ」や「ダス」や「スクリン」や「スプン」は、原語が長母音を使っており、/RN/の制約を受けて、やはり、/RN/を/N/として短縮して日本語化した語形であると解釈できるだろう。現代では、この短縮が起こらなくなってきているので、昭和初年の状態とくらべて、/RN/の制約がかなり解消していて、特に語末から2拍めの引き音ならそのまま受け入れられるようになってきていることになるだろう。

表1　引き音のゆれとゆれの解消

1932	1998
コール・タ(ー)	コールタール
シュミ(ー)ズ	シュミーズ
ダ(ー)ス	ダース
ドロ(ー)ン・ゲーム	ドロンゲーム
マント(ー)	マント
プロペラ(ー)	プロペラ
レ(ー)ン・コート	レインコート
ロ(ー)マンス	ロマンス
スクリ(ー)ン	スクリーン
スプ(ー)ン	スプーン

それでは、現代語としては/RN/の使用に関する制約はなくなったであろうか。確かに、現代の外来語を観察しても、制約を理由とする異形態が観察されない。「パターン」と「パタン」はどちらも使われてはいるが、「パターン」が/RN/の制約を受けて「パタン」になっているという解釈は成立しないだろう。もしそのような制約が現代にも強く残っているなら、「シーン」も「シン」になるはずだし、同様の例が多数見つかるはずだからだ。『分類語彙表』の外来語で使われる「ーン」にしても語末や形態素末に限られている。「カードローン」や「メーンバンク」などもそうであるが、/RN/は形態素末という制約が残っている可能性がある[15]。オノマトペの/RN/にしても、畳語形式の「カーンカーン」

[14] 外来語の語末から2拍めの位置は、窪薗 (2006) によれば、促音が挿入されやすい位置だとされているので、促音と引き音の両方の特殊音素の日本語での使われ方には共通性があることになろう。なお、語末から2拍めの位置と語末も位置としては区別があるようで、引き音については、マントーやプロペラ―がマントやプロペラになったように、語末も引き音が安定しない傾向にある。促音も語末では基本的に使われないので、この性質も促音と引き音に共通している。

[15]「ジーンズ」の場合は、日本語の複数形の形態素として「ズ」を認めるわけにもいかないので、形態素末の/RN/という解釈はあてはまらないだろう。

のような形式でも形態素末の「ーン」と捉えることができる[16]。オノマトペの「－ン」も形態素末か、引用の助詞とも解釈できるトの直前に限られているようだ。フィンランドのスポーツ用の腕時計などを製造している会社にSUUNTOの日本での社名が「スント」なのは、形態素末でない「－ン」が現代日本語でも受け入れられにくいためではないだろうか。SUUNTOのフィンランド語の発音はスーントである[17]。現代日本語の語彙に/RN/が少ないのは音配列上の制約の結果であるが、現代語では制約はそれほど強くなくなってきていることも確かである。しかし、スーントがスントになっているのは現代語にも多少残っている/RN/制約の影響である可能性が高い。表１の「ドロ（ー）ンゲーム」が「ドロンゲーム」に固定し、「コ（ー）ン（ド）ビーフ」[18]が「コンビーフ」に固定したことはこの種の制約の傾向が反映していると見ることもできるだろう。

３．引き音や撥音に後続する促音（/RQ/と/NQ/）について

/RQ/と/NQ/については、促音が他の特殊拍に後続するという点で共通しているので、共通している特徴をまとめておこう。まず、こういう音連続がいかなる場合に成立するか考えてみると、撥音であれ、引き音であれ、特殊拍に続いて促音が現れるのは、二つの場合であることが分かる。

ａ．撥音や引き音で終わる形態素への促音の添加
ｂ．撥音や引き音で終わる形態素と促音で始まる形態素の結合

（a）については、撥音で終わるオノマトペや引き音で終わるオノマトペに促音が添加される場合が典型的である。（b）の方は、かなりの数の促音で始まる形態素が日本語にあり、これが、撥音や引き音で終わる形態素と組み合わせて使われる場合が想定できる。特殊拍は普通名詞や動詞や形容詞の語頭には立たないが、助詞や形態素なら、促音で始まる（と解釈できる）ものがある。以下、３．１では、オノマトペの促音添加について扱い、３．２から３．４で促音で始ま

[16] 語頭に近い位置で特殊拍の引き音が削除される傾向は、やはり、外来語の促音についても同様である。窪薗（2006）は、キャップと言うのに、キャップテンにならずにキャプテンになる例などをあげ、外来語の語末付近にだけ促音があらわれる現象を音韻構造の問題と述べている。なお、窪薗（2007）では、日本語話者の知覚の問題という可能性にも触れている。

[17] 世界の諸言語の発音を実際に聞くことができるホームページ Forvo（http://ja.forvo.com/）で確認できる。

[18] 日本で最初の本格的外来語辞典である『日用舶来語便覧』（棚橋一郎・鈴木誠一著、1912、明45）の見出し語は「コーン ビーフ」である。

る形態素が撥音や引き音で終わる形態素と結合する場合について扱う。

3．1　語末が特殊拍のオノマトペに促音が添加される場合

現代日本語で/RQ/が実現する場合の多くはオノマトペで、オノマトペが/RQ/の普及に大きな役割を果たしたようだ。しかし、一般辞書の見出し語にはオノマトペの採録は少なく、現代語の状況についても、言語変化についても、一般の辞書をもとに調べることは容易ではない。『大言海』（1932－37）のような大型辞書でも、風間（1979）で調べると、/RQ/は「ぼうっと」だけしかない。『暮らしのことば擬音・擬態語辞典』（山口仲美編、講談社、2003）はこれまでに出版された類書の中では/RQ/を含むオノマトペを多くあげていて、61語収録している。

7．うーっ、うおーっ、がーっ、きーっ、ぎーっ、ぎゃーっ、くーっ、ぐーっ、げーっ、ごーっ、さーっ、ざーっ、じーっ、じゅーっ、じろーっ、じわーっ、すいーっ、ずいーっ、すーっ、ずーっ、そーっ、ぞーっ、たーっ、だーっ、たーっぷり、たたーっ、だだーっ、たらーっ、つーっ、つつーっ、でれーっ、どーっ、どたーっ、どばーっ、にーっ、にゅーっ、ばーっ、ぱーっ、ばばーっ、ひーっ、びーっ、ひやーっ、ひゅーっ、びゅーっ、ぴゅーっ、ふーっ、ぶーっ、ぷーっ、ふわーっ、ほーっ、ぼーっ、ぽーっ、ぼけーっ、ぽけーっ、ぼさーっ、ぼやーっ、むーっ、もやーっ、もわーっ、わーっ、わわーっ（61語）

この61語の中で「明治の文豪」（明治期の翻訳作品も含む）に見つかるのは、ひらがなで書かれたものもカタカナで書かれたものも調べ、「ゴーッ」「ピューッ」「すーっ」「そーっ」「ワーッ」「ズーッ」「ギーッ」の７語しかない[19]。その一方で、/RQ/の/R/の無いものならかなり使用されているものもあるし、/RQ/の/Q/が無いものも使用例のかなり見つかるものもある。

表２は、明治期以降の幾つかのオノマトペの語形変化を新潮社電子媒体で見つかる語形をもとに暫定的にまとめてみたものである。明治期以降変化していない/RQ/もあり、①のボーットは変化していない。ボーットという語形は、促音添加の結果ではないし、引き音添加の結果でもない。ボーットは古くから成立している語形で、新たに促音化された語形ではない。②のスートの場合は、

[19] /RQ/の例は、「明治の文豪」では、他に、「アーッ」「キキーッ」「モーッ」「ああ、ああああ、ああーッ」、それから、小文字のアを使い、やや特殊な書き方の「わァーッ」もあった。

この語形が廃れ、スーットに変わったので、引き音後に促音が挿入された例であることはほぼ確実である。

表２

意味分野	明治期	明治後期以降
①　「ぼんやり」	ボーット	ボーット
②　消滅・出現・開閉	スート	スット、スーット
③　喧噪開始	ワット、ワート	ワット、ワーット
④　時間的継続	ズット[20]	ズット、ズーット
⑤　停止・固定	ジット	ジット、ジーット

スットやスーットが対立しながら並立しているが、ボーットの場合は対応するボットのような語形もない。ボーットの引き音や促音に特殊な意味が感じられないのはそのためであろう。特殊な意味を追加するために促音化されたという歴史的な事情もなく、引き音の有無による対立もなく、したがって、引き音が象徴的に表しやすい長時間や強調などの意味も生じない。③のワーットでは、ワットから出来たという解釈も可能だが、ワートに促音が挿入されたとも解釈できる。④や⑤は、引き音添加で生まれた新しい語形（ズーット、ジーット）が旧来の語形（ズット、ジット）と対立するようになったということになる。新潮社電子媒体の「明治の文豪」では、「障子が、すうと開いて」（夏目漱石「虞美人草」1907）、「スーと消えたり」（泉鏡花「歌行燈」1910）、「それを相図のように、インヴァネスを着た男がすうと立ち上った」（夏目漱石「明暗」1916）のように促音の無い語形が使われ、唯一の例外が森鴎外の「かのように」（1912）である。「大正の文豪」では、久米正雄の「学生時代」（1918）が「すうと」（２例）と「すうっと」（１例）の両方を使っているが、他の２作品では「すうっと」や「すーっと」になっている。経過は異なるが、/Rto/が明治期だけで、末期以降に消えている点は共通している。

那須（2007b）は「ボケッと」について促音語尾が「瞬時性・スピード感・急な終わり方・力強さ」を象徴する意味を表しているとするのは説得力がないとして、促音の象徴的意味には懐疑的で、オノマトペの促音語尾は「韻律的機能」を果たしていると説明している。スートが使われなくなり、スーットが使われるようになった言語変化は、那須の言うように、「瞬時性・スピード感・急な終わり方・力強さ」などの意味的機能とは無関係であると考えられる。引き音の

[20] 明治期のズットは時間的意味のものに限定したが、別の意味分野ではズートも使われることがあったようで、二葉亭四迷は四種類の「ズーと」を「浮雲」（1887－1889）で使っている。「秀た眉に儼然とした眼付で、ズーと押徹った鼻筋」、「チョイと会釈をして摺足でズーと火鉢の側まで参り」、「行過ぎてからズーと後姿を一瞥して」、「チョイと我帯を撫でてそしてズーと澄ましてしまッた」。

有無による対立は現代語ではオノマトペ以外でもホッテオクとホーッテオク[21]のように指摘できるが、促音の有無による対立は、バンとバンッなど、新たに作られ出しているようには思われるが、オノマトペでもあまり利用されていない。

/NQ/の場合はどうだろうか。過去に出版された擬音語・擬態語辞典の索引を調査して、/NQ/を使用している例は、『暮らしのことば擬音・擬態語辞典』の「かんっ」が筆者が発見した唯一のもので、そこでは「かんっ」は「鳴った音がすぐにおさまる感じがある」とされている。オノマトペで/NQ/の普及が始まっていることを証言するもので、今後は増えていくものと思われる。とくに引用の「と」と関連している「～と」の形式のオノマトペでは「と」(や「って」)の直前に促音が現れやすく、今後は「～NQと」の形式のオノマトペが一気に普及しそうである。Googleの検索で現状を確認すると、すでに、促音を末尾にとるオノマトペは数多く確認できる（８から12の用例)。

８．お客さんのお弁当をレンジで温めていたら「ぽんっ」と、軽い音がした
９．Ｂは「ふんっ」て感じです。
10．そしたらその少年と肩が「ポンっ」ってぶつかったらしいんですよ。
11．夫の「ふんっ」という笑い方が気になる
12．「ばたばたばたっ」「どんどんっ」という、恐らく子どもが走り回ったり、飛び跳ねる音が夜12時過ぎまで続きます。

「って」やここで使われているような「と」の用法は、引用の用法と捉えることが可能であるが、「って」の前半部の促音や「と」の前に入ることがある促音については、引用内容と本文の間の分離を象徴的に表している無音のポーズ（促音はt音の前では無音のポーズ）と解釈することができる。「って」や「と」を引用助詞と呼んでおこう。「っと」は書き言葉では現在でも規範的な書き方とは言えないと思うが、ネット上では既に使うひとは使っている。「ますっと言われました」などを引用符に入れてGoogleで検索すると、「『すべておまかせします。』っと言われました。」など大量の用例を見つけることができる。（８）や（９）の用例では、促音をオノマトペ側の括弧内に入れていて、促音を引用助詞

[21] ホーッテオクであるが、明治期以降の辞書類を調査すると、以前の発音はホッテオクだったことが確認できる。したがって、先祖がえりと解釈できる発音である（/RQ/の音配列上の制約がやはり解消しつつあるため)。しかし、現代のホーッテオクの用法は、単なる先祖がえりではなく、引き音なしの標準的な言い方に対して引き音を使って強調した言い方として利用されるようになったとも解釈できるだろう。

の側に帰属させずに、オノマトペの側に帰属させている。こういう書き方をしているひとは、ポンット（テ）のポンッまでがオノマトペで、ト（テ）が引用助詞という感覚だと思われる。トはそういう解釈も可能だろうが、テの場合は、無標の標準形はッテなので、必ずしも妥当な解釈とは言えない。しかし、(9)のように書く人が多数派になれば、引用助詞の「って」は促音で終わるオノマトペと使われる場合に「って」ではなく「て」が使われるという規則で説明しなければならなくなるだろう。ここは、現在なら、「『ふん』って感じです」と書くひともまだあるはずで、現在のところ促音の帰属ははっきりしていない。(10) ではオノマトペの促音語尾に引用の「って」が重ねてあって、ッッテ、つまり、/NQQ/の音配列が表記上は成立しており、/QQ/が本当に2拍分あるのか疑問が残るが、ネット上でこの文を書いているひとの感覚は、オノマトペの促音語尾と引用助詞の前半または直前に挿入される促音を区別していることが分かる。那須（2007a、2007b）は、「韻律的機能」としてだけオノマトペの促音語尾を捉え、この二つの促音を同一視して理解しようとしているが、関連はあるだろうが、区別する感覚も日本語使用者にあるということになるだろう。

3.2　促音で始まる形態素「って」「っこ」「っぽい」についての予備的考察

促音で始まる[22]形態素を見出し語として掲載している国語辞典があるが、幾つかの現行の辞典から以下のような形態素を抜き出すとことができる。

13. 「っきゃ」「っきり」「っけ」「っこ」「っこい」「っこない」「って」「ってば」「っても」「っぺ」「っぽ」「っぽい」

これらの促音で始まる見出し語は以前にはなく、増大傾向で、それが/RQ/と/NQ/を生み出しているのだろうか。必ずしも促音で始まる形態素が増えているわけではないことは、江戸時代にも少なからぬ語や形態素が促音で始まっていたことから分かる。(14) は『江戸語大辞典』(前田勇編、講談社、1974)[23]のものである。

14. 「っきゃあ」「っくら」「っけ」「っけえ」「っこ」「っさしゃる」「っさっしゃる」

---

[22] 形態素の先頭に促音があるかないかは解釈の問題であり、「っぽい」ではなく「ぽい」を見出し語にする辞典もある。

[23] 本稿では、近過去からの言語変化として明治期以降の言語変化に限定して考察しているが、『江戸語大辞典』やオランダ語からの外来語は明治期のはじまりについて判断する上での参考として用いている。

「っさる」「っし」「っしゃる」「ったら」「っちゃあ」「って」「っても」「っとて」

促音で始まる形態素の種類が増えたのでないなら、促音で始まる形態素の用法が広がり、使用頻度がふえ、結びつく前項の形態素の種類が増え、撥音や引き音で終わる形態素とも結びつくようになったということが考えられる。江戸時代と現代で共通している形態素を調べることができれば、言語変化の事実や実態が調べられるはずである。(13) と (14) で共通している見出し語には「っけ」「っこ」「って」があり、この三つは、いちおう、言語変化を調べるには好都合の形態素ということになるだろう。しかし、形態素が促音で始まっていても、引き音や撥音が先行しなければ、/RQ/と/NQ/は生じない。『江戸語大辞典』の「っけ」は「たっけ」や「だっけ」の「っけ」であり、この系統の「っけ」は現代まで続いているが、促音に先行するのは現在でもタやダだけなので、「っけ」に他の特殊拍が先行することはない。「っけ」には他にも「しゃれっけ」や「商売っけ」の「っけ」もあるが、促音の有無は「って」や「っこ」や「っぽい」とは異なる原理で挿入されているようで、促音を伴う形式の形態素が無標の標準形ではない（「ひとけ」「嫌気」「寒気」など)。ということで、「っけ」をもとに/RQ/や/NQ/を調査することは難しいということになるだろう。

「っこ」と「って」の場合は、現代までの言語変化を調べるのに向いていると言えそうである。「っこ」の場合は、金田一（1988：111）が特殊拍が３連続する例としてあげた「ウィーンっ子」のような人間を意味する場合と、人間以外の「隅っこ」「駆けっこ」などのふたつを区別することができる。「ウィーンっ子」は、「ベルリンっ子」、「ロンドンっ子」と同様に/NQ/が使われる例を考えることは可能であるし、現代語の事例はネット上で豊富に見つかる。しかし、この種の複合語は国語辞典やアクセント辞典などの見出し語で確認できるほど高頻度の語ではない。また、限られたデータによる判断であるが、明治期には人間を意味する「ッコ」が促音で始まる形態素としてまだ完全に確立していなかった可能性がある。1873年生まれの泉鏡花は「歌行燈」(1910) で「いや、その顔色に似合わない、気さくに巫山戯た江戸児でね。」と書いているし、「婦系図」(1907) では合計７回江戸っ子を登場させているが、促音を入れたものを１回(「江戸ッ児」)、入れないものを「江戸児の親分の、慶喜様」を含めて６回（「江戸児」５回、「江戸子」１回）使っている。新潮社電子媒体の「明治の文豪」では、他に、1862年生まれの森鴎外が「ヰタ・セクスアリス」(1909) で「お国ものではない。江戸児である。」と促音を表す文字を入れないで書いている。「っ

て」の場合も複合語を作るわけではないので、辞書の見出し語などで調査ができないのは「っこ」と同様であるが、「って」の場合に好都合なのは、使用頻度が高く、言語変化が調べやすいことである。連語としても「ってば」や「っても」があるし、俗語から探せば、「っていうか」、「ってかんじ」がある。

『江戸語大辞典』は見出し語としていないが、やはり古くから使われてきている言い方に「っぽい」がある。「〜っぽい」を含んでいる語が江戸時代にまったくなかったわけではなく、現代とは意味が異なるが、『大辞典』は「プロらしい」と言う意味の「くろっぽい」、「素人くさい」という意味の「しろっぽい」をあげてはいる。明治期でも「〜っぽい」という形式の語彙はまだ少なかったようで、新潮社電子媒体の「明治の文豪」ではまだ多くなく、色彩語としての「白っぽい」や「黒っぽい」の他は、「安っぽい」や「湿っぽい」や「哀れっぽい」ぐらいが目立つ程度である。ただし、この頃でも、促音で始まる形態素としては「っぽい」はまだ確立していなかったようで、現代なら促音を伴うようなところで、促音がない使い方も散見される。二葉亭四迷は「片恋」(1896) で「白ぽい」を2回、「白っぽい」を1回使っている。田山花袋は「田舎教師」(1909) で「愚痴っぽい」を使っているが、「理屈ぽい」は促音のない語形を使っている。「理屈ぽい」という語形は夏目漱石も「道草」(1915) で使っている。ただし、「明暗」(1916) では「理屈っぽい」と「理屈ッぽい」を使っている。また、「坊ちゃん」(1906) でも「(っ) ぽい」については両方の語形が使われていて、「憐れっぽくって」と「憐れぽくって」の両方が見られる。「大正の文豪」では促音のない「ぽい」は使われなくなっていて、見つかるのは、有島武郎の「或る女」(前篇、1913) に「白ぽい鰹魚縞の袴」[24]が出てくるだけである。現代では「っぽい」は促音で始まる形態素として確立していると思われるし、大幅に用法や使用範囲を拡大しており、使用頻度も高くなっているようである。したがって、最近の言語変化に絡めて/RQ/や/NQ/を調べるなら「っぽい」を含む複合語の調査は有効であろう。

さて、「って」「っこ」「っぽい」などの促音で始まる形態素の促音が脱落すること、あるいは、形態素の先頭に促音があることについてはこれまでどのように記述されてきただろうか。「っぽい」の場合は、上で見たように、明治期にはまだ促音で始まる形態素として確立していなかったと考えられるので、確立して以降のことを問題にしたい。「て」と「って」の使いわけと撥音の関係はいち

[24] なお、岩波文庫を底本にした青空文庫版では「白っぽい鰹魚縞」となっている。

おう定説が出来ているようで、『明鏡国語辞典』（北原保雄編、大修館、2002）でも『日本語新辞典』（松井栄一編、小学館、2005）でも撥音のあとでは「て」になることに触れている。

ところが、「っぽい」の促音の有無については定説がまだないようで、『日本語新辞典』では、「多く、上の語との間に促音が入って」と述べるが、促音の有無についての規則には触れていない。『広辞苑』では「ぽい」を接尾辞とし、初版（1955）以降「上の語が促音化する」と説明しているが、促音化するのが上の語だという根拠が示されているわけではない。『あいまい語辞典』（芳賀綏他著、東京堂、1996）は、「なぜ必ず、『促音便』が入るのかについて定説はない」と書いている。「っぽい」は、このように、促音で始まる形態素かどうかということには定説もなく、あまり問題にされて来なかったようで、近年用法に広がりを見せ、接尾辞から助動詞への機能を持つようになってきたことも指摘され（田村2004：43、小原2010：75）、多くの論文[25]が書かれているが、論文名には「っぽい」ではなく「ぽい」を使うものがほとんどである。小松・木村（1997）には「上接語との間に促音が入り『―っぽい』と発音されることが多いが」とあるが、それ以上の説明はない。梅津（2009）も「ぽい」を題名と論文中で使っているが、注で「『ぽい』は『っぽい』あるいは『ぽい』の形で接尾辞となるのだが」と述べてはいるが、促音の有無についてさらに考察するということはない。田村（2004：37－38）では、文庫本50冊分の現代小説を調べ、「ぽい」の出現状況を調べ、「全ての語において促音化が起こっている」とまとめ、Web上に出現する「ぽい」では、「小説の中では、『白っぽい』『皮肉っぽい』のように全てが促音化した形であったが、Web上での用例には、「外人ぽい」「猫ぽい」のように促音化していない用例が数多く見られた」という促音の有無についての指摘をしている。ただし、「外人ぽい」がどの程度使われ、「猫ぽい」がどの程度使われ、両者には差がないのかどうかなどのデータは出していない。「促音化していない用例が数多く見られた」とまとめるが、撥音の有無との関連など、もう少し追及できたのではないかと思う。Googleで「オヤジ（っ）ぽい」を検索して、促音使用比率（促音使用形と不使用形の全体を100%として割合を出したもの）を出してみると、97.3%だったので、Web上では「促音化していない用例が数多く見られた」とまとめるのも正しくなく、「オヤジ（っ）ぽい」では、ネット

[25]「っぽい」の新しい使い方についての論文は極めて多いが、音配列の制約に関する本稿の関心とは直接関係していないので、列挙はしない。参考文献にあげているのは引用したものにとどめている。

上でも促音を使用するのが基本であることが分かる。Web上の大量のデータの中には、わざと変わった言い方をしている場合があるだろう[26]。大量のデータには書き間違いも混じっているだろう。そういう特殊なものもネット検索なら少数検出されるのは当然ではないだろうか。また、小説の中では「全てが促音化した形」とまとめられているが、「少年ぽい」も１例見つかっているのを見落としている。田村（2004）から/NQ/が関係していそうな例はひろってみると、他には、現代小説では、「冗談っぽい」が２例見つかっているだけだから、/NQ/が２例に対して/Q/が１例で、３分の１の割合で促音が取れていることになる。Web上のデータでは、「外人ぽい」、「日本っぽい」「基本理念っぽい」「ゲーム関連（っ）ぽい」とあげているので、やはり、/NQ/が「ぽい」と「っぽい」の使い分けと関連していることを示唆している。現代小説とWeb上のデータとの促音の有無についての差は田村（2004）が想定しているほどには大きくないことは間違いない。

このように、「っぽい」の促音の有無をめぐる規則性については、先行研究では不問にされるか、追及されていないように思われる。じつは、「っぽい」の促音には、以前は、明確な規則性がなかったものと思われる。小松・木村（1997：42）に『日本国語大辞典』（小学館）の67語をあげているが、促音の無い語形として以下があがっている。

15. 藍ぽい、恨みぽい、まじぽい、汚れぽい、理屈ぽい（５語）

現代ではむしろ違和感を感じるか、特殊な言い方と思われるこれらの例は、形態素としての「っぽい」が確立していなかった時代に使われたものであろう。

３．３　「って」「っこ」「っぽい」と撥音後の促音（/NQ/）の現代の普及状況から

国語辞典の語彙や地名に/NQ/の音配列は存在しないが、日本語で/NQ/がまったく使われていないわけではない。

表３は、日本でもっとも人口の多い姓から10姓を使い、「～さんって」と「～さんて」をGoogleで検索して[27]、示される件数から促音使用比率を出してみた。

---

[26]「田中さまて誰」と「って」にしない言い方を使うと授業で答えた大学生２人に理由を聞いてみると、親しい間柄で、わざと変わった言い方をするときに使うという返事だった。

[27] インターネット上の言語データは雑多なデータであり、過去の言語データから現在のものまで含まれるが、全体として比較的新しく、若い人の言語データを反映しているのかもしれない。過去の文学作品などよりもはるかに促音使用率が高く、したがって新しい傾向を示していると考えられるのはそのためであろう。

人口の多い姓を使ったのは、不特定多数の言語使用者による多くの使用例が期待できるからである。結果は姓が異なっても大きく違わず、「〜さん（っ）て」は80%程度の促音使用比率（「山本さん（っ）て」の77.8%から「田中さん（っ）て」の82.5%まで）だった。「〜様（っ）て」の場合は撥音に後続しない「って」になるが、99.9%から100%の促音使用比率になり、差の20%程度は/NQ/の制約が理由であると考えられる。現代でも/NQ/の音配列上の制約は強くはないながらも存在しているということになろう。現代語だけの観察では、「〜さん（っ）て」の80%程度の促音使用比率が増えつつあるのか、減りつつあるのか、分からないが、次章で明治以降の言語変化を観察するが、「〜さん（っ）て」の促音使用比率の約80%は増えてきた結果である。つまり、/NQ/の制約は解消傾向にあり、「て」が減って、「って」が撥音後でも使われるようになってきている。

表３

10大姓	「さん(っ)て」促音使用比率	「様(っ)て」促音使用比率
佐藤	81.7%	99.9%
鈴木	81.0%	100.0%
高橋	79.6%	99.9%
田中	82.5%	100.0%
渡辺	78.5%	100.0%
伊藤	80.5%	99.9%
山本	77.8%	99.9%
中村	79.8%	99.9%
小林	78.6%	99.9%
加藤	79.4%	100.0%

「〜（っ）ぽい」の場合も/NQ/の音配列の成立について考えてみよう。小松・木村（1997：44－45）は1993年から1994年にかけて「〜っぽい」の実例118語を収集しているが、これを見ると、「〜っぽい」ではなく「〜ぽい」になるものは撥音で終わる語から作られてる「〜ぽい」に限られている。

16. 自分ぽい、図書館ぽい、寅さんぽい、成金ぽい、人間ぽい、見栄晴さんぽい、ミシンぽい、旅館ぽい、下品ぽい（９語）

ただし、撥音で終われば必ず促音が削除されるわけではないことも小松・木村のあげている語形から分かる。

17. アクションっぽい、Ａラインっぽい、お嬢さんっぽい、外人っぽい、コットンっぽい、冗談っぽい、少年っぽい、天然っぽい、バリトンっぽい、えーかげんっぽい（10語）

とくに外来語から「〜（っ）ぽい」が作られる場合に促音が含まれるものが多いようで、(17）の10語のうち４語は外来語から作られている。(16）の促音の入らない複合語では外来語は９語に１語しかないので、外来語では、促音を使っ

た「っぽい」が使われやすいものと予想できる。

末尾が撥音の語や撥音以外の語に「(っ) ぽい」を加えて、Googleで検索件数を調べ、促音使用比率を出してみると、名詞から派生する「〜(っ) ぽい」は、促音使用比率が高いものがほとんどで、撥音で終わる名詞との組み合わせで/NQ/の音配列が生じても促音使用比率がそれほど低くならない。外来語から作る「〜N (っ) ぽい」の促音使用比率が高いのは (17) で予想した通りで、撥音で終わらない外来語とほとんど変わらない促音使用比率になっている。

18. ポーク (っ) ぽい (99.9%)、キャリア (っ) ぽい (99.8%)、ビーフ (っ) ぽい (99.8%)、ビール (っ) ぽい (99.8%)、ウィスキー (っ) ぽい (99.6%)
19. チキン (っ) ぽい (99.3%)、パトロン (っ) ぽい (99.1%)、マンション (っ) ぽい (99.1%)、カメラマン (っ) ぽい (99.0%)、ユニコーン (っ) ぽい (98.8%)、ワイン (っ) ぽい (98.6%)、アクション (っ) ぽい (98.2%)、スローガン (っ) ぽい (98.0%)、レストラン (っ) ぽい (98.0%)、イケメン (っ) ぽい (97.9%)

(19) の最後の例のイケメンは全体としては外来語ではないが、外来語のように作られた語形ということになるだろう。さらに、外来語だけでなく、漢語から作る「〜N (っ) ぽい」も促音使用比率が高いようである。

20. 教員 (っ) ぽい (99.8%)、公務員 (っ) ぽい (99.6%)、来年 (っ) ぽい (99.4%)、公園 (っ) ぽい (99.3%)、来年 (っ) ぽい (99.3%)、幼稚園 (っ) ぽい (99.2%)、終電 (っ) ぽい (99.1%)、警官 (っ) ぽい (98.9%)、内紛 (っ) ぽい (98.9%)、満員 (っ) ぽい (98.9%)、美人 (っ) ぽい (98.9%)、老人 (っ) ぽい (98.4%)、旅館 (っ) ぽい (97.9%)、青年 (っ) ぽい (97.1%)

しかし、漢語から作られる「〜N (っ) ぽい」であっても、促音使用比率がかなり低い「少年 (っ) ぽい」(68.2%) もあり、その理由は不明である。名詞の語長が長くなると促音が落ちやすくなる傾向は「外人 (っ) ぽい」(96.1%) と「外国人 (っ) ぽい」(63.9%) の促音使用比率の差から推定できる。「美人 (っ) ぽい」や「老人 (っ) ぽい」に比べると、「[地名] 人 (っ) ぽい」は促音使用比率が低くなっているが、この場合は意味分野による促音使用比率の低下は指摘できるが、語長とも関係しているかどうかははっきりしない。なぜなら、短めの「タイ人 (っ) ぽい」や「チリ人 (っ) ぽい」で促音使用比率がかえっ

て低くなっているからである。

21. アメリカ人（っ）ぽい（78.9%）、日本人（っ）ぽい（77.7%）、西洋人（っ）ぽい（71.3%）、アジア人（っ）ぽい（69.8%）、東洋人（っ）ぽい（67.9%）、インド人（っ）ぽい（65.6%）、タイ人（っ）ぽい（59.0%）、チリ人（っ）ぽい（42.2%）

語種の点では、和語から作られる「～（っ）ぽい」は外来語や漢語から作られる「～N（っ）ぽい」に比べて少しだけ促音使用比率が低く、撥音で終わる和語の名詞と解釈できる語は「さん」や「ちゃん」で終わるものに限られているが、和語は/NQ/の制約のなごりがやや残っている語種と言えるかもしれない。

22. 奥さん（っ）ぽい（99.4%）、お父さん（っ）ぽい（98.9%）、お母さん（っ）ぽい（98.5%）おばあちゃん（っ）ぽい（97.5%）、おじさん（っ）ぽい（96.6%）、赤ちゃん（っ）ぽい（94.8%）、お嬢さん（っ）ぽい（94.7%）、おばさん（っ）ぽい（94.6%）、おのぼりさん（っ）ぽい（93.4%）、坊ちゃん（っ）ぽい（88.7%）

さて、名詞ではなく、動詞の否定形から派生する「N（っ）ぽい」なども現代では使われるようになっているが、こちらは/NQ/の音韻制約を強く受けるようだ。表４は動詞から生じた「～N（っ）ぽい」についての検索結果をまとめたものである。「足りん（っ）ぽい」は促音使用比率が高く、「足らん（っ）ぽい」もやや高い比率だが、その理由は不明。「出来んっぽい」や「知らんっぽい」はあまり使われず、「出来んぽい」や「知らんぽい」が使われている。動詞の否定形由来の「N（っ）ぽい」の促音使用比率がかなり低く、促音が削除された語形が多い理由は不明だが、同じ傾向は、「～（っ）て」でも確認でき、名詞と結びつく場合よりも動詞の否定形と結びつく場合に促音が削除されやすい傾向を示す。動詞の否

表４

「～(っ)ぽい」	促音使用比率
足りん(っ)ぽい	88.5%
足らん(っ)ぽい	56.2%
おらん(っ)ぽい	55.4%
行けん(っ)ぽい	34.7%
動かん(っ)ぽい	21.8%
行かん(っ)ぽい	21.3%
下がらん(っ)ぽい	17.4%
やらん(っ)ぽい	17.0%
出来ん(っ)ぽい	13.8%
知らん(っ)ぽい	10.7%
上がらん(っ)ぽい	9.6%
分からん(っ)ぽい	9.3%
ません(っ)ぽい	7.2%
出ん(っ)ぽい	6.5%
来ん(っ)ぽい	4.1%

定形から作られる「〜（っ）ぽい」でも撥音が関係しない場合は、「しらない（っ）ぽい」(99.3%)、「知らない（っ）ぽい」(86.8%)、「できていない（っ）ぽい」(99.5%)、「出来ていない（っ）ぽい」(99.4%）というふうに、表記その他の影響は受けるが、はるかに促音使用率は高くなり、促音を使った言い方の方が無標の標準形である。

次に「〜（っ）子」の場合である。1985年から1998年の14年分の朝日新聞の記事が元になっているNTTデータベース（天野・近藤 2000）には「江戸っ子」が295回出てくるが、「江戸子」は使われていなかった。この「地名（っ）子」は使われる頻度が高そうで、実はそれほど高くなく、NTTデータベースでは他の使用例を見つけることはできない。膨大なネット上のデータで撥音で終わる地名のウィーンやベルリンを使い、「〜（っ）子」をGoogleで調べた結果を出しておこう。まず、比較のために「江戸（っ）子」や「ローマ（っ）子」を調べると、「っ子」が標準的な形態素として確立しているので、99%以上の高い促音使用比率になっている。

23. 江戸（っ）子（促音使用比率：99.2%)、ローマ（っ）子（促音使用比率：99.1%)。

一方、撥音で終わる地名「ベルリン」や「ウィーン」では、「ベルリン子」や「ウィーン子」を使うひとが少しいて、「江戸（っ）子」や「ローマ（っ）子」と比べて数パーセント低い促音使用比率を示している。「ロンドン（っ）子」の場合は、促音を使わない語形を使うひとがかなり多くなっている。

24. ベルリン（っ）子（促音使用比率：96.6%)、ウィーン（っ）子（促音使用比率：95.3%)、ロンドン（っ）子（促音使用比率：82.6%)。

地名ではない「〜（っ）子」なら、NTTデータベースでは「お母さん子」が７回、「お父さん子」が５回、促音の入らない語形で使われていて、「[地名］っ子」と「お母さん子」や「お父さん子」は促音に対してのふるまいが異なるようにも見えるが、この違いは、現在、解消しつつあるものと思われる。ネット上ではこの二つは促音使用比率がかなり高くなっていて、新聞記事データベースのような傾向はもはやないものと思われる。

25. お母さん（っ）子（促音使用比率：95.9%)、お父さん（っ）子（促音使用比率：91.8%)。

促音使用比率は95.9%と91.8%で、この結果から考えると、「〜っ子」と「〜子」では、無標の標準形がすでに「〜っ子」になっていると考えられる。

「〜（っ）子」とは少し異なる「半分こ」についても考えておきたい。おそらく幼児語由来の語なのであろうが、俗語としてはそれなりに使用頻度はある。NTTデータベースでは、合計５回、促音のない語形で出てきている。Googleでも促音使用比率は高くない。

26. 半分（っ）こだよ（促音使用比率：3.9%）
27. 半分（っ）こしました（促音使用比率：3.6%）
28. なんでも半分（っ）こ（促音使用比率：3.1%）

「(っ）子」の場合と比べてかなり促音使用比率が低い理由として考えられるのは「半分こ」が「隅っこ」や「駆けっこ」と同じ「っこ」が付いているとは意識されていないのではないか。そのため、他の「っこ」への類推が働かず、「こ」から「っこ」への回帰の力が働きにくいのではないか。また、既存の語形の方が新規の造語に比べて変化しにくいことも指摘できる。たとえば、「交換（っ）こ」という言い方は、漢語に「(っ）こ」が接続しているところも、「半分こ」と同様であるとはいえ、以前には典型的ではなかったタイプであるし、NTTデータベースには出現しないし、まだ使うひとはあまり多くないようである[28]。おそらく、比較的最近使われるようになった語であろう。「交換（っ）こ」の促音使用比率を調べてみると、「半分（っ）こ」よりもはるかに高い使用率をしめすのは新造語が既存の語に比べて言語変化を受け易いためと解釈できるだろう。

29. 交換（っ）こしよう（促音使用比率：39.0%）
30. 半分（っ）こしよう（促音使用比率：3.6%）

「〜（っ）子」は必ずしも使用頻度の高い表現ではなく、新聞記事に基づくデータベースや小説類では言語変化はたどれないが、ネット上での現代の使われ方は、「江戸（っ）子」や「ローマ（っ）子」に比べて、「ベルリン（っ）子」や「ウィーン（っ）子」や「ロンドン（っ）子」の促音使用比率はわずかに低

[28] ネット上では使用しているひとを見つけることは容易である。モデル兼女優の佐々木希さんが「交換こ」とブログに書いているし、若手女優の長澤まさみさんは沢尻エリカさんとのラジオ対談で写真集の「交換こ」を話題にしていて、コーカンコと発音している。また、歌詞検索サービスの「歌ネット」(http://www.uta-net.com/）を検索してみると、「元気の交換こをして」を一節に含む曲が１曲あった。しかし、20数人の静岡大学の学生に聞いてみたが、「交換（っ）こ」を使うのは二人しかおらず、若いひとの間でもまだそれほど普及した言い方だとも思えない。

く、それが/NQ/の音韻制約に対応していると思われるが、現代では促音が使われることがはるかに多い。以前は規範的だった「お母さん子」や「お父さん子」が現代ではネット上で「お母さんっ子」や「お父さんっ子」の方がはるかに多くなっていることは確認できるので、「〜（っ）子」の促音使用比率が現代にかけて高くなってきていると考えられる。また、「〜（っ）子」ではない「〜（っ）こ」の場合では、最近の造語でより高い促音使用比率になることを「交換（っ）こ」と「半分（っ）こ」の対比で確認した。

3．4　「って」で撥音後の促音（/NQ/）の明治以降の言語変化をしらべる

新潮文庫電子媒体の明治から昭和までの文学作品で「〜さん（っ）て」を調査した[29]。表５の発表年が1920年までの作品では「〜さんて」が29件に対して「〜さんって」が４件しか現れていない。/NQ/の制約は強かったことが想定できる。発表年を最新の1981年から1987年のものまで追っても、促音使用比率の傾向は明確ではなく、上昇したり、下降したりしている。表６では、1911年から始まる10年間からは分かりやすい上昇変化していることが表から見てとれる（12%—31%—53%－73%）。

発表年では促音使用率の上昇変化が分かりにくくなっているのは、十分な量のデータが得られていないという理由が大きいだろうが、作家の生年の方が/NQ/の使用・不使用と関係しているからであろう。同時期に発表された文学作品であっても生年の早い人は「〜さんて」を使う傾向が強いようである。発表年が最近であっても、生年が早い作家は「〜さんって」よりも「〜さんて」を使う傾向がある。たとえば、1961年から1970年までの発表年で促音使用率が18%と低くなっているのは、1912年生まれの源氏鶏太が「〜さんて」しか使わず、18件使っていることや、

表５　発表年による推移

作品の発表年	〜さんて	〜さんって	促音使用比率
1898〜1910	4件	0件	0％
1911〜1920	25件	4件	14%
1921〜1930	21件	17件	45%
1931〜1940	24件	20件	45%
1941〜1950	19件	4件	17%
1951〜1960	21件	16件	43%
1961〜1970	47件	10件	18%
1971〜1980	32件	32件	50%
1981〜1990	18件	9件	33%
全体	211件	112件	35%

[29]「さん（っ）て」の調査では翻訳作品は除いた。連載などで複数年にまたがるものは、連載終了年をもって出版年とした。

同じく1912年生まれの新田次郎が9対2の割合で「〜さんて」を多く使っていることが関係しているだろう。同じ時期の作品でも、1930年生まれの梶山季之の「女の警察」(1967)や三浦哲郎の「忍ぶ川」(1961)は「〜さんって」しか使っていない(それぞれ2件)。

表6　生年による推移

作家の生年	〜さんて	〜さんって	促音使用比率
1861〜1870	17件	2件	11%
1871〜1880	5件	2件	29%
1881〜1890	29件	25件	46%
1891〜1900	39件	10件	20%
1901〜1910	31件	28件	47%
1911〜1920	44件	6件	12%
1921〜1930	25件	11件	31%
1931〜1940	18件	20件	53%
1941〜1950	3件	8件	73%
全体	211件	112件	35%

現代のネットでの検索結果では、前章で確認したように、「〜さん(っ)て」は約80%の促音使用比率なので、新潮社電子媒体の結果から/NQ/の制約の解消がさらに進んだ状態である。つまり、現代の「〜さん(っ)て」の促音使用比率は、過去に上昇を続けてきた結果だと考えられ、/NQ/の制約は解消する傾向にあることが分かる。

3.5　引き音後の「って」による/RQ/の成立と近過去から現在までの普及状況

特殊拍に促音が後続するもうひとつのタイプの/RQ/の場合について考えてみよう。松崎(1994:81)は「ありませんって」や「とおった」の例をあげて、/NQ/や/RQ/が和語においても「極めて僅少ながら」存在が認められると述べている。

現代日本語のラ行の五段動詞では規則的に促音便が生じ、テ形は「って」になり、過去のタ形は「った」になる。そのため、語幹末に引き音を含む動詞は/RQ/が成立し、トーッタ(「通った」)やコーッタ(「凍った」)やホーッタ(「放った」)が使われることになる。これは、ヘボンの『和英語林集成』の幕末の初版(1867)で確認できる。『日葡辞書』(1603)での発音も促音便が生じていたことは確かで、touottaやcouottaとされ、Zaxiqiga couotta.(「座敷が凍った」)の用例もあげている。ouoの発音の解釈次第では、ouoのoは引き音(長母音の後半部)とは分析できないかもしれないが、ヘボンの『和英語林集成』までの間に引き音が成立したことはおそらく確かであろう。したがって、日本語(少なくとも横浜や江戸周辺の言葉)では遅くとも江戸時代後期には/RQ/がラ行規則動

詞で規則的に使われていたことになる。他にも、『江戸語大辞典』(1974) には/RQ/の言い方を過渡期の実例として複数あげているので、江戸期の/RQ/の制約の在り方は必ずしも単純ではなかったようだ。大辞典の説明では、「ほうべた」が促呼され「ほうっぺた」になり、それが「ほうぺた」や「ほっぺた」になったらしい。「ほうっぺた」の短呼が「ほっぺた」という説明である。また、「小僧っ子」についても、コゾーッコとコゾッコの両方の使用例をあげており、言語変化とししては、コゾーッコの引き音が削除され、コゾッコになったと解釈できるが、/RQ/の制約がそれほど強くなかったからこそコゾーッコの使用例が江戸期にあったとも解釈できる。

さて、現代まで「通って／た」や「凍って／た」を使い続けてきたからといって、/RQ/の音配列上の制約が近過去の日本語において強くなかったとは必ずしも言えない。/RQ/について、ラ行の規則動詞以外の場合を考えてみよう。「いいって」という言い方である。古くから使われていただろうか。「いいってことよ」はテレビの時代劇や時代小説では江戸っ子の言葉として定着している。もし江戸時代からこの言い方が使われていたのなら、「いいって」の部分は/iRQte/と/RQ/を使うことになり、特殊拍の連続の/RQ/が成立した早い例ということなるが、『江戸語大辞典』では「いいと言う事よ」を説明して、「いいってことよ」はまだ見えないと説明しているので、こういう言い方が江戸時代から使われていたというわけではないようである。「いいって」は明治時代にも使用例は少なく、「明治の文豪」では、夏目漱石が4例（「我輩は猫である」1905：1例、「野分」1907：2例、「虞美人草」1907：1例）使っているだけである。「大正の文豪」でも里見弴の「多情仏心」(1922) の1例だけである。「いいと云（言）う」なら使われているので、「いいって云（言）う」が明治・大正期にはほとんど使われていなかったのは、やはり、/RQ/制約が働いたためだと考えられる。現在は「いいって言う」がかなり使われるようになっているが、それは/RQ/制約が解消しつつあることを示しているのだろう。なお、「ないって云（言）う」と「ないと云（言）う」なら、明治・大正期にも両方ともそれなりに使われていて、「って云（言）う」や「と云（言）う」の部分には問題がなく、「いい」と「って云（言）う」や「と云（言）う」との接続が問題だったことも確認できる。

/RQ/制約が日本語の近過去において強く存在したことを示す他の積極的な証拠としては、江戸期以降の外来語で/RQ/がまったく使われていないこともあげられるが、いくつかの方言形の存在をあげることもできる。棒や比較的小さな

主に木製の棒を指して使われる方言形「ぼっこ」である。ネット上の方言辞典サイト[30]では、北海道方言[31]、津軽方言、茨城方言で使われるようである。ボー(「棒」)を「〜っこ」の形式にするなら、本来は、「ボーッコ」となるはずが、/RQ/制約のために促音に先行する引き音が削除されたものと思われる。同様の例は「っこ」を多用する東北方言では十分起こりうることで、秋田方言では、小さな神社を「お堂っこ」が「おどっこ」である。また、用事の「用」に「っこ」を付けてものを青森県などでは使うようで、ネット上に発音表記は「よっこ」になっている。

31. 青森駅の方さ用っこあったついでに、周辺ば散歩してきました〜
32. 帰り際に書類出す用っこあって、総務さ寄ったんず。

/NQ/では、制約が理由で促音が削除されたのに対して、/RQ/制約では、促音ではなく、引き音が削除される傾向があるのかもしれないが、これは別に考察することにして、現代の/RQ/について考えるために、引き音で終わる「〜藤」姓[32]に「(っ)て誰」を加えてGoogleで検索して、促音使用比率を出したのが表7である。

表7

「〜藤」姓	促音使用比率
佐藤(っ)て誰	94.4%
伊藤(っ)て誰	94.6%
加藤(っ)て誰	94.5%
斎藤(っ)て誰	94.2%
後藤(っ)て誰	95.0%
近藤(っ)て誰	93.1%
遠藤(っ)て誰	93.7%
斉藤(っ)て誰	95.3%
内藤(っ)て誰	93.4%
鈴木(っ)て誰	95.6%
高橋(っ)て誰	95.2%
田中(っ)て誰	95.9%

「鈴木(っ)て誰」[33]など、姓が引き音で終わらない場合の促音使用比率は95%台なのに対して、「〜藤」姓の場合は93%台が3姓、94%台が4姓、95%台が2姓とわずかに低めの促音使用比率であるが、差はほとんどないと言えるだろう。現代の/RQ/の制約はほとんど解消していると見ることができる。もちろん、/RQ/制約では、促音ではなく、引き音が削除される傾向があるのだとしたら、姓の末尾が/R/の場合は、/RQ/の/R/を削除すると、姓の一部を変形してしまうことになり、それを避けるために/RQ/が維持されるという可能性も関係しているかもしれない。しかし、/RQ/制約が現代でも残っていれば、「用って何?」を口語で言うときに「ヨッ

[30] weblio(http://www.weblio.jp/)は「複数の辞書や用語集を一度に検索し、一度に表示する、統合型オンライン辞書サービス」と説明されている。
[31] 北海道の「ぼっこ」については、静岡大学の同僚の堀博文氏にご教示を受けた。
[32] いずれも血縁関係はなくとも「藤原」氏に由来する姓である。
[33] 無関係なものが大量に検索されないようにここでは「誰」を付けて検索した。

テナニ？」という発音も容認されるはずであるが、静岡大学の学生に聞いてみたが、「違和感がない」という回答はえられなかった。つまり、現代でもやや制約としての残っている/NQ/と異なり、/RQ/の場合は、ほとんど制約として残っていないのであろう。制約がなければ、制約のために/RQ/の引き音が削除されていた語形が不自然に感じられるようになるのは当然であるが、ホッテオクという語形からホーッテオクという先祖がえり的語形が増えているのは制約の解消が理由にあると解釈できる。

３．６　現在始まっている新しい特殊拍後の促音の使い方を言語変化から判断する

「ほんっとに」などは更に普及し、口語では、強調の意味で撥音を含む語に促音を挿入する方法が一般化していくだろう。撥音終わりのオノマトペに促音が後続する例は増え続けるだろう。

Googleの検索では、「ほんっとに」はすでにかなり高頻度で使われており[34]、「ほんとに」との差はもうそれほどない[35]。

33. ほん（っ）とにいいよね（促音使用比率：46.1%）
34. ほん（っ）とに知らない（促音使用比率：42.6%）
35. ほん（っ）とにおいしい（促音使用比率：37.2%）
36. ほん（っ）とに分からない（促音使用比率：36.2%）

「ほん（っ）とに」以外に筆者が読売新聞のネット掲示板「発言小町」の書き込みの中で見つけた新しいタイプの促音挿入形を幾つかあげておこう。いずれこういう語形もふつうの言い方や書き方になる可能性がある。文末に入る「っ」の音価ははっきりしないが、感嘆符との使用もよく見られ、発音上も文末に強勢があるものと思われる。引用の「と」が後続する例では、ポーズという無音部分の挿入を伴うことになるのだろう。

37. その調子じゃあご主人ぜんっぜん（←全然）反省なんてしてないですよね。

---

[34] ネット上で普及していても、日常の口語でも同じように普及していることにはならないかもしれない。

[35] すでに一般化している口語形のホントニを使うひとは、とくに発音通りに表記したいのでなければ、あえて「ほんとに」と書かないで、「本当に」と書いているのでないかと思う。ホントニまで逸脱した語形を使う場合は、「本当に」ではなく、「ほんっとに」と書くのではないだろうか。促音使用比率が高くなっているのはそのためだろう。なお、「本っ当に」という表記もネット上ではかなり普及しているが、発音はホントニであろう。

38. しんっけんに（←真剣に）思い出してみました。
39. これしか考えられませんっ。
40. 「私、悪くないもんっ！」と、幼稚園児の女の子のようなこと言ってますよね。

４．要約

特殊拍の連続は、もともと日本語にはほとんどなかったもので、現在でも基本語彙の内部にはほとんど入り込んでいない。明治期にもまだあまりなかったことは、現在の辞書の見出し語や明治期の文学作品にほとんど使用例が見つからないことで確認することができる。/RN/や/NQ/や/RQ/があまり見つからないというだけでなく、/RN/や/NQ/や/RQ/が生じた場合に、特殊拍の連続で一方の特殊拍が削除されたと考えられる事例も指摘できる。また、明治以降の言語変化をしらべると、次第に特殊拍の連続が許容されるようになってきていることも確認できる。現代日本語では、引き音後の撥音をかなり受け入れるようになってきているし、特殊拍後の促音を許容する傾向も明瞭である。つまり、/RN/と/NQ/と/RQ/の音配列上の制約は、現在でも存在することは確かだと思われるが、解消傾向にあると言える。とはいえ、/RN/と/NQ/と/RQ/のそれぞれについての詳しい状況は、言語変化がひとつの型で説明できるような推移ではなく、それぞれ独自の経過をたどっていて、現在も、音配列上の制約の強さもことなり、独自の共時的状態をしめしているようである。長音、撥音、引き音の特殊拍には意味的な強調機能があるし、促音には引用と引用内容の分離機能などの機能もあり、それらの機能が特殊拍の組み合わせをふやす要因になったと考えられる。今後、特殊拍連続の使用頻度はふえ続けていくものと予想される。

【参考文献】（本文や注に明記したものを除く）

天野成昭・近藤公久編（2000）『頻度①』日本語の語彙特性第７巻、『頻度②』日本語の語彙特性第８巻、三省堂。
荒川惣兵衛（1932）『外来語学序説』、1986年に名著普及会から復刊。
岩波書店辞典編集部編（1992）『逆引き広辞苑』、岩波書店。
梅津聖子（2009）「現代日本語にみる接尾辞『ぽい』の広がり」『拓殖大学日本語

紀要』(19)、55－64。
小田切進編（1993)『日本近代文学年表』、小学館。
小原真子（2010)「接尾辞『－ぽい』について」『島大言語文化』、島根大学法文学部紀要言語文化学科編、59－76。
風間力三（1979)『綴字逆順配列語構成による大言海分類語彙』、冨山房。
北澤尚（2003)「文末形式『て』『って』『ってば』の推移について」『東京学芸大学紀要２部門』54、235－245。
北原保雄編（1990)『日本語逆引き辞典』、大修館。
金田一春彦（1988)『日本語』新版（上)、岩波新書。
窪薗晴夫（1995)『語形成と音韻構造』、くろしお出版。
窪薗晴夫（2006)『アクセントの法則』、岩波書店。
窪薗晴夫（2007)「外来語の音韻構造」『言語』36（６)、60－67、大修館。
小松祐子・木村秀次（1997)「接尾辞『ぽい』小考」『明海日本語』(３)、明海大学、41－51。
斎藤静（1967)『日本語に及ぼしたオランダ語の影響』、東北学院大学。
斉藤由美子（1990)『日本語音声表現法』、おうふう。
三省堂編集所編（1997)『漢字引き・逆引き 大辞林』、三省堂。
田島毓堂・丹羽一彌編（1987)『日本語尾音索引』、笠間書院。
田端敏幸（1999)「漢語と外来語の関係について」『言語文化論叢』(５)、千葉大学外国語センター、(41）－（55)。
田村康男（2004)「接尾辞『ぽい』が結び付く語句について」『広島大学留学生教育』(８)、37－44。
徳川宗賢・宮島達夫編（1972)『類義語辞典』、東京堂。
那須昭夫（1994)「オノマトペに現れる促音について」『言語学論叢』(13)、筑波大学一般応用言語学研究室、25－37。
那須昭夫（2007a)「オノマトペ語尾の分布と相互の関係」『筑波日本語研究』(12)、筑波大学人文社会科学研究科日本語学研究室、１－25。
那須昭夫（2007b)「オノマトペの語末促音」『音声研究』11（１)、日本音声学会、47－57。
松崎寛（1994)「和語・漢語・外来語の語形と特殊拍の音配列上の制約」『東北大学文学部日本語学科論集』第４号、75－86。
丸山直子（2002)「話しことばの助詞―『って』を中心に―」、『日本文学』98、東京女子大学、117－131。

渡辺誠治（1995）「題目提示に関わる『φ』、『ッテ』をめぐって」『さわらび』（４）、文法研究会、54－64。